

## 上海気質

わたしは結局は中庸主義の人間である。とても閑話が好きだが、上海気質の閑話は好きではない。というのはそれは大抵度が過ぎるからであり、またつまり俗悪であるからである。上海灘はもともと西洋人の植民地である。そこの（しばらくそう言う）文化は買弁とゴロツキと妓女の文化であり、根っからまるで理性と風致がない。この上海精神が一種の上海気質となり、いろんな所に流布して、多くの厭らしい上海気質のものを生み出す、文章もその一つである。

上海気質の厭らしさは、性の問題において最も明瞭に見て取れる。その欠点は猥褻にあるのではなくてその厳正さにある。我々は性の関係は実に人生活動と思想の最大部分を占めると信じてよい。猥褻な話をするのは許容されるばかりか、意味があるとさえ思われる。ただうまく話さえずれば、これにはいくつかの条件がある。一つは芸術的な趣味があること、二つは科学的な理解があること、三つは道徳的な節制があることである。同じく性的事物を語るとして、その人が根本的な性知識を持っており、又芸術的な選択の手段を使って、言うべきことをうまく割り振ることができるならば、それはとても文学の趣味がある、いや、さらに道徳的な価値のある文章だと言える。でなければただの人に厭気を起こさせる下品な話でしかない。上海文化は金と色をもって中心とし、そして一般社会も又飽き飽きするほどの頹廢の空気に満ちており、何か飢渴にも似たような熱烈な追求というものが見出せない。結果は自ずと欲望を満足させたシニカルな玩世の態度となる。だから上海気質の人々から見れば、女人は娯楽の道具であり、女根は醜悪不祥のもので、そして性交は又男子の享樂の権利であり、女人にとっては又汚辱の供え物となる。性に関する迷信およびそのいわゆる道徳とは全て伝統的なものであり、だから一切の新しい性知識・道徳から新しい女性に至るまで彼らの嘲笑の的でないものはない。女学生ともなればむろんなんでも間違っている。というのは彼女たちは某甲の言うような“古き訓え”に従おうとなどしないからである。上海気質の精神とは“聖道を崇め奉り、礼教を維持する”ものである。文章であれ口頭であれどんな話をしようともそうなのである。彼らは実は馬褂〔長衣の上に着る腰までの上着・礼服〕をひっくり返して着た道学者であって、聖道会の人間なのである。

新文学の勃興以来、“ユーモア”を提唱する人があり、世間は誤解してこれも上海気質の亜流だと思っているが、実はそうではない。ユーモアは現代の文章では一つの分子に過ぎず、その他の主要な成分はやはり上に述べた三つの条件である。思うに、これはおそらく芸術的趣味と道徳的節制から出たものであろう。なぜならユーモアは過度に言おうとはしない、やはり Sophrosune\*であって——わたしは“中庸”な表現と訳したい。上海気質の閑話は度を越した言い方をしないものではなく、これは根本的に似ないものである。

上海気質とは一種の風気であって、あるいは中国の古すでに之有るものであって、必ずしも上海灘ができて以後に発生したものとは限らないかもしれない。というのはこの上海気質の基調はつまり中国固有の“言いがかり”であるからである。しかしこれは要するに上海が最も濃厚で、上海の空気と最も調和しているから、それをこのように言うのである。いささか上海の友人たちには済まないけれども、これも復古精神の一つであって、虎印や獅子印の思想〔北洋政府の教育

部長章士釗や国粹主義派]とは道は違っても帰宿するところは同じであって、この反動の時代にあつては、彼らの発展はまさにしかるべきことである。民国十五年二月二十七日、北京にて。

※初出：1927年1月1日『語絲』第112期

---

\*Sophrosune ギリシア語で小惑星帯の中の大きな小惑星。プラトンでは「中庸」を意味する。